

金遣いの荒い性分

ところで、空海は金銭感覚も乏しかったのだろうか、15才で伯父の阿刀大足の下に行く際、大学で学ぶ際などにもお金は必要だったろうし、30才を過ぎてからの遣唐使の資金、寺建立の資金、と親のすねをかじるだけかじっているように思われる。

遣唐使の資金として用意したはずの、留学生としての20年分の滞在費は、2年程経って帰る時にはすっからかんにしてしまっている。

ただこの時の事情を推察すると、唐においては、日々の生活費としての出費もあるだろうが、それより遥かに大きいと思われるのが、知識、情報を得るためのものであったろう。書も先生について教えてもらっているし、般若三蔵らにもインド哲学等を学んでいる。そういった場合は謝礼もしたであろうし、またそこに至る情報を集めるのにも金銭が必要な場合もあっただろう。

空海は‘時’と‘情報’にお金を惜しまなかったのだ。それもあって二年と言う短期間で、密教、書、五明あらゆるものを、普通の人が一生涯かかっても得られない程、手にすることが出来たのだ。

そんな中で、空海が最もお金をつぎ込まざるを得なかったのが、密教相承に関するものだと思われる。

法燈を授けてくれた恵果阿闍梨に対する謝礼を始め、経典を持ち帰るにしても、人を頼んで書写してもらわないといけない。仏像仏画もこれまた新たに調製してもらう必要がある。修法、儀礼で使う仏具も必要だ。衣、袈裟といったものもある。

例えば曼荼羅ひとつ調製する事を考えても、今と違いそのすべてを手作業で描いていかないといけない。義明（ぎみょう）を始めとする、空海以外の、唐に残る弟子達のために、それまであったものは必要なので、空海が日本に持って帰るものは基本的にすべて新たに調製しなければいけなかったはずだ。

しかし、これだけのものを揃えるとなると、はっきり言って空海一人が20年唐に滞在する為の資金では全く足らなかったはずだ。

今ではその請来品のひとつひとつが国の宝であり、当時の日本にとっても、いずれもそれまで見たことの無い逸品ばかりである。20年分とは言え、一人の生活費程度で足りるはずなど無い。

出港までに残された僅かな時間を使って、少しでも多くのものを蒐集して日本に請来するために、帰国のために都長安を離れた後も移動先の長官に協力を求めており、その依頼した文を見ると、空海は手持ちの資金が底をついてしまい、経典や仏画などを揃えるために人を雇うことも出来ず、独力で孤軍奮闘する空海の様子を見ることが出来る。『性霊集巻第五』によると、

今、わたくし空海が、現に長安で写す事が出来た経典論疏などはおよそ300余り、それと胎蔵、金剛界の大曼荼羅といったものを力の限り、財力も惜しまず求めて来ました。ですがわたくしが微力なのに比べ、その教えを表すものは広大にあり、未だそのほんの一部を求める事が出来たに過ぎません。資財も底をついてしまい作業する人を雇う事も出来なくなってしまう、寝食の間を惜しんでわたくしの独力で書写にはげんでおります。

とある。

しかし、そんな事情もわからない親にしてみれば、お金はどうしてしまったのかと思っただろう。まさかたった2年で20年分全部使ってしまったとは、我が子ながらその金遣いの荒さに驚いたに違いない。